

## 下痢症患者や鶏肉類などから分離された *Campylobacter jejuni* の解析

保健科学課 徳島 智子・吉澤 千尋

松田 正法・樋脇 弘

中村学園大学短期大学部 古田 宗宜・小田 隆弘

### 第 32 回日本食品微生物学会学術総会

近年、カンピロバクターは細菌性食中毒の病因物質として常に首位を占めている。腸炎の予後は良好であるが、まれに末梢神経障害を引き起こすギランバレー症候群（GBS）に移行することが知られている。

しかし、ヒトや食品から分離された *C. jejuni* 菌株について GBS との関連性を調べた報告例は国内では少ない。そこで本研究では、当所において腸炎患者および食品から分離された *C. jejuni*123 株について、GBS 発症に関連する 3 種のガングリオシド様 LOS 生合成遺伝子の保有状況を調べるとともに、血清型別および薬剤感受性試験を実施した。

調査の結果、GBS 関連遺伝子をすべて保有する株は 19 株検出された。また、日本における GBS 患者から高頻度で分離される Penner O 群菌は、患者由来の 1 株が検出された。薬剤感受性試験については、供試菌はキノロン系薬剤、テトラサイクリンに対しては高い耐性を示した一方、エリスロマイシンやホスホマイシンに対しての耐性率は低かった。特にエリスロマイシンに対しては全株感受性であった。